

行動療法の事例研究が原著となる要件(私見)

<p>事例研究をする前提</p> <ul style="list-style-type: none"> 介入困難例の報告 生活を変化させる十分な改善 研究の背景や意義の十分な説明 	<p>【補足】</p> <p>発表の意義があると思うなら、それを表現する必要がある。 「障害特性」から、生活全般にまで変化が及ばないこともある。 先行研究のレビューと、自分の研究の新しい点の売り込み。</p>
<p>アセスメント情報の記載</p> <ul style="list-style-type: none"> 問題の経緯に関する十分な記述 診断についての明示的記載 機能分析についての明示的記載 	<p>病歴の中に、アセスメントに必要な情報が記載されている。 精神疾患等の場合は、自ら診断を試みた結果を記載する。 これが無くては、行動療法の原著になることはありえない。</p>
<p>介入内容の説明</p> <ul style="list-style-type: none"> 標的行動の明確な記載 介入内容の具体的な記載 介入の特徴や工夫の図表による表示 機能分析と介入の対応が分かる 	<p>介入の対象にするのはどの行動なのかを明確に記載する。 介入内容を具体的に、表なども活用しながら記載する。 介入内容が具体的にイメージできるように図表をうまく使う。 どの介入が、機能分析のどの結果に基づくかを明示する。</p>
<p>介入と結果の因果関係の証明</p> <ul style="list-style-type: none"> 少数事例実験計画法の使用 複数回のベースラインデータの呈示 グラフ・表でのA/B/Cの経時的変化呈示 介入と行動変化との対応が分かる 	<p>多層ベースライン法、ABAB法が望ましいが、使えないことも。 介入前に標的行動を複数回測定すれば(AB法)、とても強い。 標的行動、弁別刺激、行動の所産のどれかを経時的に示す。 上記A/B/Cの経時的変化と、介入との前後関係を記載する。</p>
<p>介入結果の持続性の証明</p> <ul style="list-style-type: none"> 長期的経過(終結1年以上)の記載 	<p>最低でも半年後の経過を記載する。</p>

* 上記項目の全てではなくても、ほとんど全てを満たすようにできれば、原著でいける！？(熊野, 2011)